

## 第1回高知県教育研究所春季連絡協議会

5/22に上記の会が行われました。全体会では鳴門教育大学臨床教育学研究開発機構長の吉井健治教授より「不登校児童生徒の支援 ～学びの多様化学校の在り方～」についての講演を聞かせていただきました。不登校・不登校傾向児童生徒に対応する際に重要な点についてご教授いただいたのでご紹介させていただきます。

今回の講演は吉井教授の著書に書かれている内容をもとに、お話していただきました。

### 相手の心に近づく聴き方 | 2の技

#### ☆①鏡になって反射する

③目を使って聴く

⑤言葉を口に入れ、よく噛んで、腹に入れ、消化する

⑥自然に話したくなる質問の仕方

⑧肯定的に言い換えること

⑩自己開示

②鳴き声として聴く

④話されなかったことを想像する

⑦こころの波長を合わせる、波長をずらす

⑨支えること、探すこと

⑪分身になる

#### ☆②意味を探し求める

#### ①鏡になって反射する

教育相談等の傾聴において、聞き手が話し手の発言の中から重要と思われる言葉を抽出し、そのまま繰り返して返す技法を「反射（リフレクション）」と呼びます。一般に「オウム返し」と称されることもありますが、単に言葉を機械的に繰り返すのではなく、話し手の感情に寄り添った「声の調子」で返すことが極めて重要です。とりわけ、話し手の感情表現に焦点を当てて行うものを「感情の反射」と言い、相談活動において重要な役割を果たしています。

具体例 話し手：「この先どうなるか心配です」  
聞き手：「この先どうなるか、心配なのですね」  
(※相手の不安な感情に声のトーンを合わせて返す)

#### 【反射がもたらす効果】

適切に反射を行うことで、相談活動において以下の3つの効果が期待できます。

- (1) 話し手が「相手にしっかりと聴いてもらえている」という受容感・安心感を得られる。
- (2) 聞き手が自分の意図を正確に理解しているかを、話し手自身が確認できる。
- (3) 自分が発した言葉を他者の口から客観的に聴き直すことで、自身の思考や感情の整理が促される。

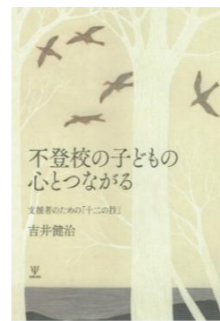
なお、吉井教授の指摘によると、話し手が同一の言葉を2回繰り返して発話した場合は、そこに強い感情が込められている可能性が高いとされています。そのため、当該発言に特に注目し、必要に応じて記録に留めるなど、重点的に聴き取ることが肝要です。

#### 【反射における留意点】

反射を実践するにあたっては、以下の2点に留意しなければなりません。

第一に、「声の調子」の不一致です。話し手が「悔しくて、悔しくて」と感情を高ぶらせて反復した際、聞き手が「悔しかったのですね」と平淡な調子で返した場合、共感的なズレが生じ、反射の効果は消失してしまいます。

第二に、「不用意な言葉の言い換え」です。話し手の言葉をわずかでも別の表現に変換した場合、それは反射とは言えなくなります。



吉井 健治(2017)  
不登校の子どもの心とつながる：支援者  
のための「十二の技」  
金剛出版

例えば、話し手の「のけ者にされてくやしかった」という発言に対し、聞き手が「のけ者にされてつらかったのですね」と応じたとします。話し手は「悔しさ(怒り)」を訴えているのであり、「辛さ」を訴えているわけではありません。このように言葉を言い換えられると、話し手は「自分の真の感情を受け止めてもらえなかった」と捉え、信頼関係の阻害要因となり得ます。相談場面においては、話し手が選択した表現を忠実に返すことが原則です。

#### ②意味を探し求める

我が子に対して悩みや不安を抱える保護者は、「どうして自分の子が不登校になったのか」「なぜ我が子に障害があるのか」「生きる意味は何なのか」など、常にその意味を探し求めています。そして、その問いに対して自身が腑に落ちる理由を求めているものです。カウンセリングは、そうした意味を探すプロセスの伴走者となることであり、その具体的なアプローチとして先述の「反射」が用いられます。ここでカウンセラーの資質として必要とされるのは、待つこと、共感すること、傾聴すること、認めることであり、決してレッテルを貼ったり決めつけたりしない姿勢です。深い悩みを抱える人に対しては、聞き手が「一緒に探していきましょう」と寄り添い、歩調を合わせるものが何よりも大切になります。

### 不登校と関わる | 2の技

#### ☆①学校にとらわれないで子どもに必要な経験を提供する

③よく観察して・交流してタイプを理解する

⑤なかまと交流し、孤独感に飲み込まれない

⑦自分くずしと自分探しの道を共に歩む

⑨登校刺激は見守りながら適時適量で与える

#### ☆⑩マッチングとタイミングという関係性を調整する

②原因を1つに決めつけずに、全体の調和を保つ

④人の目が気になることを理解し、安心感で包んであげる

⑥温めながら、できるところまで少しずつ動かす

⑧子どものこころの傷を受け取る：キャッチハート

⑩つながりを絶やさず、手助けできる機械を待つ

⑫自分の道を切り拓く

#### ①学校にとらわれないで子どもに必要な経験を提供する

親は我が子が学校に行かなくなって初めて、不登校がこれほどまでに家族を悩ませるものなのかと気づかされます。勉強の遅れ、友人関係、世間体、あるいは将来への不安。その悩みは尽きません。しかし、「学校に行かなければいけない」という執着が強すぎると、親子ともに強い緊張感から身動きが取れなくなってしまいます。再登校は目標ではなく、あくまで「結果」です。少し気持ちを楽に持っている方が、双方にとって良い方向へ進みやすくなります。通常の学校に通わない場合でも、他の選択肢があることを知れば、「学校へ行かなければ」という固定観念が和らぎ、不安も小さくなります。

学校外の学びの場には、教育支援センター（適応指導教室）やフリースクール、家庭を拠点とするホームスクールなどがあります。（※なお、ホームスクールは英米などでは法的に認められていますが、日本では義務教育の制度上、現状では公的な出席代替としては一律に認められていません。）不登校による不安を抱える親子に対して、健全な成長・発達に必要な経験を提供することは極めて重要です。教育支援センターやフリースクールをはじめ、学習塾、習い事、地域活動、心理相談などは、それぞれが子どもの育ちを支える大切な役割を担っています。

#### ②マッチングとタイミングという関係を調整する

こうした支援を考える上で、重要となるのが「マッチング」と「タイミング」という二つの関係性を調整する視点です。まず「マッチング」とは、二者の組み合わせの適合度を意味します。子どもの持つ特性は、周囲との関係性によって異なる表れ方をするものであり、決して絶対的なものではありません。個人のパーソナリティや発達特性には、誰に対しても共通して見られる固定的な側面だけでなく、関わる相手や環境によって変化する側面があります。「こういう性格だから」と決めつけず、関係性によって変化し得るものであるという認識を持つことが必要です。

次に「タイミング」とは、二者の時間的な一致度を意味します。これを示す言葉として、ここでは「啐啄同時（そったくどうじ）」という表現を用います。雛鳥が内側から殻を突く力と、親鳥が外側から殻を突く力が完全に一致したときに初めて殻が破れ、新たな生命が生まれることを指す言葉です。これを、ある男子中学生の不登校の事例に当

てはめてみます。

中学生男子Aは不登校になってからの3ヶ月間、自宅でオンラインゲームや動画鑑賞に没頭していました。毎朝友人が迎えに来てても全く起きられない状態でしたが、保護者がスクールカウンセラーに相談を重ねるなかで親子の交流が増え、ゲームへの依存傾向は少しずつ改善されていきました。

しかし、再登校の兆しは依然として見られませんでした。そのようなある朝、クラスの友人たちが自宅の部屋まで入ってきてAを着替えさせ、半ば強引に学校へと連れ出しました。この日を境に、Aは少しずつ登校ができるようになったのです。

この事例は、一見すると突然学校に行けるようになったかのように映ります。

しかし潜在的には、彼の内側でゲーム依存の改善や親子関係の修復が進み、登校への抵抗感が薄れるなど、内側の殻が少しずつ薄くなっていました。そこへ友人たちが、絶妙な時間的契機で外側から強い刺激を与えたのです。この内と外の力が呼応した現象こそが、まさに子どもと友人たちによる「啐啄同時」の瞬間であったと言えます。



## R8年度教育研究所前期運営委員会

5月28日に上記の会を開催いたしました。冒頭の挨拶では、西村教育政策推進監より、本市の喫緊の課題である不登校問題について言及がありました。学校、教育研究所、関係団体が緊密に連携し、児童生徒が孤立しないネットワークづくりを進めていくという方針について、参加者全体で共通理解を図りました。

本会では、今年度の研究テーマ①AIを取り入れた英語学習の推進 ②不登校・不登校傾向の児童生徒に係る諸問題の改善について昨年度の成果や課題をもとに今年度の研究予定についてお話をいただきました。以下が今年度の研究予定になります。

(1) AIを取り入れた英語学習の推進  
【今後の予定】

- ・市内小中学校での授業実践・支援
- ・Google Formsによる教員・生徒へのアンケート
- ・ALTによる事前事後パフォーマンステスト実施、結果分析
- ・AI自動採点機能を用いた効果検証、結果分析
- ・GTECの結果分析(中学2、3年生で実施)

(2) 不登校・不登校傾向の児童生徒に係る諸問題の改善  
【今後の予定】

- ・不登校・不登校傾向対策委員会を年3回開催(委員との連携・交流・情報交換を行う)
- ・月3日以上欠席遅刻調査(早期の手立てをうつ)
- ・学期に1回、欠席・遅刻調査・分析(効果的な支援方法や予防的・開発的生徒指導の取組を共有する)



小学校 年間30日以上欠席児童(病欠除く)出現率

年度	須崎市内小学校	全国	高知県
R3	1.44%	1.30%	1.48%
R4	1.60%	1.70%	1.51%
R5	2.54%	2.14%	1.95%
R6	2.19%	2.30%	2.02%
R7	4.40%		

中学校 年間30日以上欠席児童(病欠除く)出現率

年度	須崎市内中学校	全国	高知県
R3	9.00%	5.00%	6.12%
R4	9.25%	5.98%	5.99%
R5	9.38%	6.71%	6.18%
R6	8.54%	6.79%	6.24%
R7	10.90%		

- 小学5年生から不登校が急増する背景と要因
- ① 学習内容の高度化(抽象的概念の導入)
  - ② 「10歳の壁(9歳の壁)」と自己意識の変化
  - ③ 対人関係の複雑化とギャングエイジ
  - ④ 第二反抗期(思春期)の入り口

委員の皆様からも、不登校に関して多くの意見が出されました。特に、今年度はアウトリーチ型SC(スクールカウンセラー)が不在であること、またSSW(スクールソーシャルワーカー)が配置されていない学校があるなど、現場の深刻な苦悩が浮き彫りとなりました。中学校の統合により学校数自体は減少したものの、支援を必要とする家庭が減るわけではありません。校内の居場所(CoCoルームなど)や、校外の居場所(支援センター、メタバース空間など)など、子どもたちが必要とする居場所は様々です。

教育研究所としては、「どこにも繋がりが無い」子どもをゼロにすることを目指し、今後とも関係各所と緊密な連携を図ってまいります。学校現場で少しでも心配なお子様がいましたら、いつでも研究所までご相談ください。

## 文科省英語×AI効果検証(事前)を実施しました!

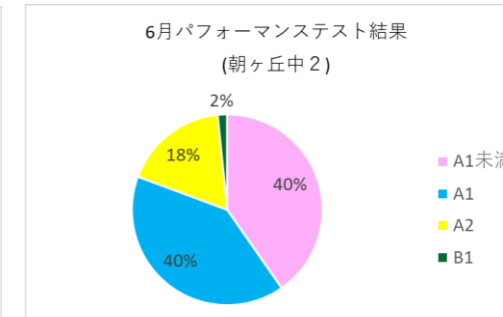
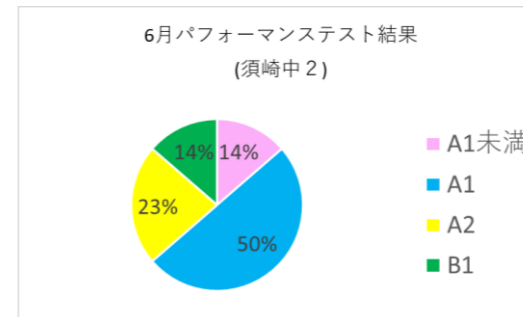
6月に、中学校2年生および3年生を対象とした英語の「効果検証」を実施いたしました。本検証は、生徒たちの現在の英語力を定量的に把握し、今後の指導法改善に活かすことを目的としています。検証内容は以下の通りです。

中学3年生:提示されたテーマについて、ALT(外国語指導助手)と即興で対話を行うパフォーマンステスト。

中学2年生:①200字程度の英文の音読 ②提示されたテーマについて自身の考えを述べるフリースピーチテスト。

それぞれの実施結果は、国際的な言語評価基準である「CEFR」のスコアを用いて評価し、現在の到達度と課題の現状把握を行いました。詳細な結果および分析は以下の通りです。

【中学2年生】

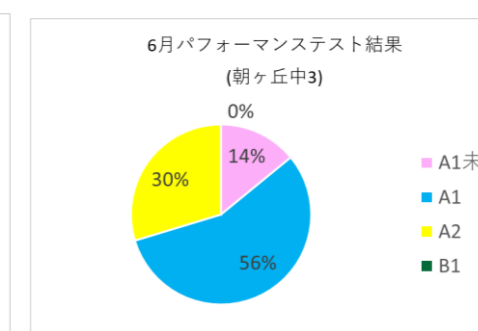
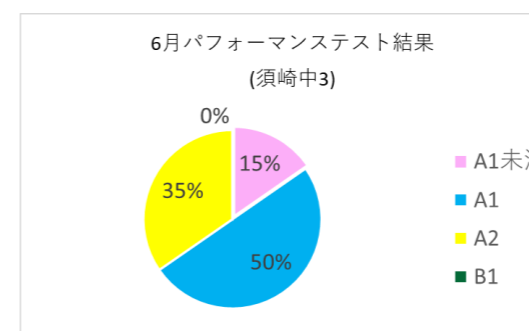


今年度の2年生の調査結果において、学校間で評価の割合に差が見られる結果となりました。

須崎中学校では、「AIレベル」が全体の半数を占めています。さらに「A2レベル」および「B1レベル」も計37%にのぼり、学年全体の87%が中学生として十分なスコアを獲得していることが分かりました。今後は、現時点で「AI未満」に留まっている生徒を「AI」へ引き上げるなど、一人ひとりが現状より一段階上のスコアへ到達できるような指導の手立てが求められます。

一方、朝ヶ丘中学校では、「AI以上」の力を持つ生徒が全体の60%という結果でした。今回は「AI未満」の生徒が全体の40%を占めており、須崎中学校と比較して乖離が見られます。この原因としては、生徒が発話しているにもかかわらず端末等の機器が正確に音声を認識しなかったというハード面の不具合や、フリースピーチにおいて生徒の発話時間が短すぎたために十分な評価(採点)が行えなかったというシステム運用の問題が考えられます。今後は、こうした受検環境や発話の定量的な確保といった課題への対策が不可欠となります。

【中学3年生】



3年生においては、対象となった2校とも同様の傾向を示す結果となりました。全体の半数以上の生徒が「AIレベル」以上の力を有していることが明らかになっています。実際のパフォーマンステストの様子を検証すると、高いスコアを獲得した生徒には、ALTからの質問に対して単に答えるだけでなく、その理由を付け加えたり、提示されたトピックについてさらに詳しく説明したりする姿が見られました。また、少数ではありますが、生徒側から自発的に話題を提供してALTに質問を投げかけたり、「Why?」や「What?」などの疑問詞を用いてコミュニケーションを深めようとする様子も確認できました。今回のテストは「即興性」をテーマとしており、生徒は自分の順番が巡ってくるまで質問内容が分からない状況に置かれていました。そのため、テスト前の待機時には不安や緊張の色を浮かべる生徒も多く見られましたが、記録された動画を振り返ると、ほとんどの生徒がしっかりとアイコンタクトやリアクションを交え、できる限り会話を継続させようと主体的に取り組む姿勢を見せていました。今後は技能面をさらに向上させる手立てを授業で仕組んでいけたらと考えています。